



みん  
な  
が  
い  
ろ  
ろ  
う  
民  
放  
史

題  
字  
中  
川  
順

TKUテレビ熊本報道編成制作局

報道制作部 酒井 麻衣

「おどんま盆ぎり、盆ぎり、盆から先や…」1966年、五木の子守唄の古里がダムに沈むという計画が発表されたとき、あの秘境がと驚いた人は少なくないでしょう。

反対訴訟は84年に和解が成立。村人たちが古里を離れ、あるいは高台の代替地に移るなか、水没予定地に残り先祖の土地を守り続ける一軒の老夫婦がいました。

この老夫婦の日常を描いた番組は09年、日本民間放送連盟賞優秀賞。ギャラクシー賞上期テレビ部門入賞。

「ダムが建設されれば水没する土地を耕す夫婦の生きざまをゆったりと描いた秀作。老人が日々の暮らしから紡ぎ出した言葉が輝いている(ギャラクシー選評)。

『みんなで語ろう民放史』は、この番組の現役ディレクターの取材日誌です。

(編集委員会)

『土に生きる〜ダム水没予定地・ある農民の手記〜』を制作して

川辺川ダムをテーマに番組を作ってみないか…

上司から、そう話があつた時、正直、戸惑い、「はい」と即答することはできませんでした。

40年以上の、紆余曲折の歴史を背負い、県政最重要課題と言つても過言ではない川辺川ダム問題。

全国的にも「東の八ツ場、西の川辺」と称されるほど、有名なダムです。また、TKUでも、川辺川ダムをテーマにした番組は過去に何本も制作されています。そんな中、入社十年目の若輩者がこんなに大きなテーマに向かつているのか、どこまで取材し、掘り下げるができるのか、不安に駆られたのです。

しかし、一方で、川辺川ダムは元東大教授の蒲島知事が「有識者会議」を立ち上げ、建設の是非を判断するという、ちょうど節目の時に迎えていました。「この節目の時に、番組を作ることができるなんて、またとないチャンスかもしれない」そう思い、この番組制作の話を受けるという苦渋の決断

をしました。

そして、平成20年7月末から月に二〜三回のペースで球磨郡五木村通いが始まりました。同じ熊本県内とは言え、局から五木村までは車で片道二時間半、往復五時間。普段は県政担当をしていたので、日々のニュース取材をしながら、ドキュメンタリー取材にあたるというのは、なかなか大変なものでした。

### なぜ水没予定地を離れない その理由を知りたい

私は村のダム水没予定地に一組の夫婦が残っていることはこれまでの新聞報道などで知ってはいましたが、「なぜこんなに不便なところに残っているのだろうか」、単にダム建設反対の意思表示だろうな、最初はその程度にしか考えていませんでした。

しかし実際に、その夫婦・尾方茂さんに会い、話を聞くうちに、それは私の勝手な思い込みだったことがわかりました。

尾方さんのダム建設に対するスタンスは「できることなら、ダムはできない方がいい」というくらいのもので、積極的なダム反対で

はありませんでした。

それでは、なぜ尾方さんはダム水没予定地を離れないのか、その理由を知りたいと思うようになりました。



土に還りたいと語る尾方さん

蒲島知事の建設是非の判断が近くなるにつれ、マスコミの五木村取材は徐々に増え、もちろん尾方さんも取材対象の一人。

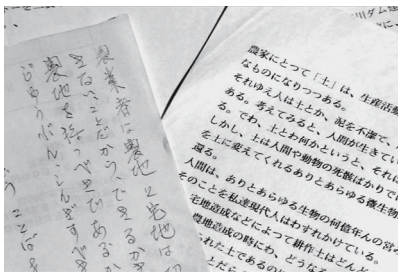
各社が入れ替わり立ち替わり、尾方家を訪れるということもしばしばでした。

そんな時、尾方さんは農作業の仕事の手を止めて、我々の話を聞き、真剣に取材に応じてくれました。ところが、一方、妻のちゆきさんは取材拒否。家の中にカメラを入れることは許されませんでした。しかし、尾方さんの日常を取材するには、ちゆきさんの協力は

不可欠だと感じ、カメラなしで邪魔するなどして何度も何度も通い、おはぎを一緒に作ったりするなど家のお手伝いをするうちに、徐々に受け入れて下さるようになりました。

### ほこりをかぶった 尾方さんの手記に出会う

そんな中で出会った尾方さんの手記。尾方家に長年、県外から通っているある女性がその存在を教えてくれたことがきっかけでした。日記や手記の類というのは、あまり人には見られたくないものです。



尾方さんが書いた手記

そこで、その女性から尾方さん

に話をしてもらい、手記を見せていただくことに成功しました。部屋の奥から引っぱり出した、ほこりをかぶった封筒から出てきた数々のメモ。

手書きのものもありましたが、一度使ったメモの裏を使ったりなど、その辺に置いてあったら捨ててしまいうような紙切れ同然のようなものほとんどでした。

しかし、そこにある言葉たちは力強さを持っていました。一日中畑の手入れをし、その恵みを受けるといふ農民・尾方さんの生活は単調過ぎるほど単調なものです。

### 農作物を生む土への感謝 先祖への畏敬の念

しかし、そこには農作物を生み出してくれる土、そしてその土を守ってきた先祖への畏敬の念があった、私たち現代人が忘れかけた、強い思いが綴られていました。私はすぐにこの手記を柱に番組を構成しようと決めました。誰かに伝えようと、手記に残してはいたものの、誰に見せるでもなく封筒にしまっていた、その尾方さんの思

いを多くの人に伝えたい。そして、なぜ、尾方さんが水没予定地を離れられないのか、その本当の理由を番組を通して知ってもらいたい、そう考えたからです。



五木村頭地地区の眺望

《ここで番組の概要を記します。

放送は平成 21 年 5 月 28 日》

子守唄の里として知られる五木村。この村の中心地、頭地地区には十年足らずのうちに新築の住宅群が一举に誕生した。ダムの水没予定地から高台の代替地に移転した人たちの住宅だ。

「土なしには人間生きていかれんと。じゃつて土ば大切にせろって言いよったですたい。父も母も言いよった」：尾方茂さん 81 歳。



スイカに網張りをする尾方さん夫婦

ダム水没予定地で生まれ、ずっとここで暮らしてきた尾方さんは周りの人たちが代替地に移った今も移転を拒み、77 歳の奥さんちゆきさんと二人、昔ながらの畑仕事を続けている。

尾方さんは枕元にメモとペンを置いておき、その日に思ったことを寝る前に手記にしたためてきた。ワープロで打ち直すこともあった。「農家にとって「土」は、生産活動の基本。だが現代の私たちの暮らしは、どんどん土と疎遠なものになりつつある。それゆえ人は土とか、泥を不潔で、厄介なものというくらいにしか考えていない趣きがある。考えてみると、人間が生きていく上で必要な衣食を産み

だしてくれるものは土である」(手記・原文のまま。以下同じ)

尾方さんの家の前を流れる川辺川は全国に知られた清流で、アユも獲れる。その川辺川が流れ込む球磨川は日本三急流の一つで、昭和 38 年から 40 年まで三年続けて大水害が起きた。特に昭和 40 年 7 月 3 日の「7・3 水害」は被害が大きかった。その翌年、国は球磨川上流の最大支流・川辺川にダムを造る計画を発表。これが「川辺川ダム」だ。

はじめ村の中心地が水没するダム計画に村は反対する。しかし、当時日本は高度経済成長真っただ中。国と県は村の年間予算の約 30 倍にあたる村作り予算を提示。やがて村は下流の治水対策と村の振興を説く国や県の説得に応じた。苦渋の選択だった。ところが、没地の地権者がダム計画取り消しの裁判をおこし、農家がダムの農業用水はいらないと裁判をおこすなどし、ダム計画から 43 年経った現在もまだ、ダム本体の工事は着工されていない。

尾方さんは代替地ができていた。台地に 50 アールの畑を持っていた。



手放した畑の土を見せる尾方さん

先祖代々伝えられてきた畑を人手に渡すことは耐えられなかったが、代替地の造成を進めたい国の要請に応じ、補償金と引き換えにやむなく畑を手放した。その畑の土を尾方さんは持ち帰り、お坊さんにお経を上げてもらった。

「土地が変わったということを先祖に報告する意味ですすたい(新しい畑に)まこうかと。私自身の畑よりも先祖が残してくれた土地ですけん。それだけのことをするぐらいの気持ちを持たんといかんとなかなかでしょうか。畑を手放す際に尾方さんは国と確約書を交わしている。国が代替地に新たに農地を作ったらそのうち 50 アールを尾方さんに適正な価格で譲渡する、という内容だ。しかし話は進んで

おらず、尾方さんは確約書通り国が畑を準備してくれるまで、今の土地を動かないつもりだ。

「土地を持ちながら、それを賣らねばならぬ国のやり方、そしてその爲に生活ができず五木を出ていかねばならぬ。百姓のかなしさ。國は百姓に何をせよと云うのだからか？」

(手記)

川辺川ダム建設計画にダム推進の立場をとり続けてきた歴代熊本県知事。しかし、平成12年、熊本県初の女性知事、潮谷知事はダム推進の立場から一転、中立路線をとった。そして平成20年、前述のように元東大教授の蒲島学者知事は「有識者会議」を立ち上げ、その判断を踏まえて知事としての姿勢を、就任から半年後に表明すると公約。翌年9月、県議会で蒲島知事はこう述べた。「現行の川辺川ダム計画を白紙撤回し、ダムによらない治水対策を追求すべきであると判断したことを表明します」。歴代熊本県知事初のダム反対表明だった。

水没予定地には尾方家の墓だけが残された共同墓地がある。ここに眠る尾方さんの父・乙平さんは50年ほど前、墓地の周りにたくさ

んの桜の木を植えた。しかし、四年前、尾方家以外の墓が移転する際、この桜の木が切られた。地区



切られた桜の木を見る尾方さん

の同意はとられていたものの、尾方さんは「桜の木が切られることは知らされていなかった」と今でも憤りを感じている。

それでも桜からは孫生えがいくつも芽を出し、青々と葉を茂らせている。

「土とは何かというと、それは人間(動物)の死骸であるというところを。しかし、土は人間や動物の死骸ばかりではない。ありとあらゆる植物、鉱物、動物の死骸を土に変えてくれるありとあらゆる微生物が生息している。その微生物の死骸がまた土に還る。人間はあ

りとあらゆる生物の何億年の営みの中で生かされているのである」

(手記)



少年尾方さんとアサノさん

尾方さんに土の大切さを教えてくれたのは祖母のアサノさんだ。激しい雨の日、田んぼの土が流れていると、アサノさんはそれを見て「もったいない」と叫び、せき止める板が運ばれてくるまで自分の体で土を止めたという。

「私は家を守る為には先代が残してくれた土地は一坪たりとも手放してはならないと思ってきた、父母の苦労、先祖の汗がいったばいはいった、山であり畑である」

(手記)

実りの秋。尾方さんはソバやサツマイモを収穫した。昔、食べ物のない時代には近所の人から作物を分けてもらうこともあったとい

う。しかし、尾方さんはそれが辛かったとは思っていない。「昔はみんなでしよったから張り合いがあったでな。隣近所と話し合うてから、今日はあそこに手伝いにいこうとか何とかいうことはあったでな。今はもう、そういうことがなくなつてしまったもんでな」

11月下旬、五木村で毎年恒例の「子守唄まつり」が行われた。

一年のうちで村がもつとも賑わう催しだ。また、この日の夜には、花火大会が村を沸かせた。しかし、尾方さんは花火があまり好きではない。「あの花火だけでも何百万とゆう金が掛つたであらうに土地を捨て農地を手放して出ていった人達のことを思う時、私には、てばなしには喜べない気がする。あの花火のようにパツと咲いてどこと



花火を見る尾方さん

もなく消えてゆく、五木村の将来を見たような気がした」(手記)



尾方家年越し

12月、年の瀬が押し迫ると尾方家も忙しくなる。豆腐作りにモチ作り、年越しソバも毎年、収穫したソバをひいて作る。尾方さん夫婦は「病気もせずに過ごせてよかった」と一年を振り返る一方で、こう話す。「二人元気でいる時にはよかですばってんな、独りになつてからが」。「やつぱお互いに心配は、しとつですよ。今まで大した病気もせずにすな、過ごしたばってんか、今度の年どぎゃんなどかて思うですよ。元気で過ごされればよかばってんですな」。水没予定地にあった神社も代替地に移った。たった一軒、水没予定地を

離れない尾方家、周りとの付き合いも減り、年々さびしくなつていくのだった。

年が明け、代替地の神社では春祈禱が行われた。これまでは地区ごとにそれぞれの集会所で出来た直会も、今では一つにまとまり、新築の伝統文化伝承館で行われている。代替地で暮らす人々はこの話す。「昔は励まし合い助け合ひしてな、仲良くしよつたつたいな」「近所付き合いが難しくはなつてきたですよ。気軽に戸が開いていない」

例年より開花が早かった五木の桜。墓地の桜もきれいな花を咲かせた。その桜を見上げて尾方さんはこう語った。「いつまでも親が桜を植えてくれたつだなつていつも思うですけん、やつぱその桜の木の下に眠りたいちゆう気持はあつですたいな。本当に土に還るということがいかに大切かわかるような気がすつとたいな。みんな火葬すればきれいかつて言わすつとばってん、私はそうも思わん。土に還ればやつぱそれだけその付近の肥やしになつてな、それまでためになるて思う、死んでからでも」。先祖代々の魂が宿る土に生き、土に

還りたい。それが尾方さんの願いなのだ。

八十八夜の日、尾方さん夫婦は茶摘をした。二人で一年分のお茶を作るのだ。



茶摘み

### スタッフに感謝！

#### 苦労だが面白い番組制作

一時間番組の制作は全く初めて。実務的には構成、編集作業など周りのスタッフがいないければ何もできない状態でした。紙面の都合でスタッフの方々のお名前をご紹介することができませんが、プロデューサー、構成作家、カメラマン、エディター、ナレーター、すべての人に支えられ、この番組を形にすることができました。

そしてなんと、番組は、民放連賞、ギャラクシー賞上期入賞の荣誉に加えて、番組ナレーションがFNS系列アナウンス大賞も受賞しました。これらは、すべてスタッフのおかげで、「酒井の番組が賞をとつた」と言われることに、多少の違和感も感じているほどです。とにもかくにも、単に華やかなテレビ業界への憧れだけでこの世界へ飛び込んできて、体力と根性だけで、ここまでなんとか十年やってきたというような私に、このような場を与えて頂き、さらには素晴らしい賞までいただくことになり、会社には本当に感謝しています。この場をお借りしてスタッフの皆様にお礼を述べさせていただきます。本当にありがとうございます。

月並みですが、今回この番組制作を経験して、制作の苦労の一方で、そのおもしろさを改めて感じる事ができましたし、決して楽な仕事はどこにもありませんが、殊にテレビの仕事は今私にとつて当面辞められそうにないものになっています。

《写真提供 TKUテレビ熊本》